



神苑の決意

本号の内容

〔主張〕 葦津珍彦の安保・沖縄論を読み解く―自衛隊「南西シフト」の検討も踏まえつつ―(木川智)：1 / 〔連載〕アジア放浪記―歴史を掘り起こし日本を見る 台湾編③(仲村之菊)：4 / 〔連載〕『倭姫命世記』を読み解く⑭ 豊受大神の御神位と伊勢神宮「中島の神事」(柳凜)：6 / 活動報告：8 / 〔記録沖縄戦〕③ 軍民・日米それぞれの視点から(沖縄戦史研究会「棒兵隊」)：10 / お知らせ・編集後記：16

1部 1000円
(別途送料160円)

主張

葦津珍彦の安保・沖縄論を読み解く―自衛隊「南西シフト」の検討も踏まえつつ―

「神苑の決意」 主筆 木川智

明治四二年(一九〇九)、葦津珍彦は福岡県宮崎にて管崎宮・香椎宮宮司の家系に生まれる。「葦津鉱業公司」「社寺工務所」などの会社を経営するかたわら、様々な思想家や政府要路と交わる父・耕次郎の都合もあり、青年時代を東京で過ごす。青年時代の珍彦は、社会主義の文献に耽溺し、当時の「革命家」たちと交流するなど、左翼思想に傾倒していた。葦津自身は共産党に入党することはなかったが、一種のシンパとして左翼運動を支援し、昭和六年(一九三一)には治安当局に検挙されるまでに至る。

翌年の血盟団事件後、葦津は思想を一変させ、「改造日本社」同人や右翼・民族派の諸氏と交わりつつ、

義弟・幡掛正浩とともに設立した「葦牙寮」を拠点に言論活動を展開し、三国同盟批判やナチス批判、東条英機政権の言論統制への抵抗など独自の民族派運動を展開する。

敗戦後、葦津は、神社の守護に傾注し、連合国による神社・神道への解体的司令の発出を見越し、全国神社の緩やかな合同団体「神社連盟」を構想し、昭和二一年の「神社本庁」設立へつながっていく。

その後、葦津は神社本庁の各役職に就任する他、神社本庁機関紙「神社新報」にて長らく健筆をふるい、「神道の社会的防衛者」を自任する立場から、靖国神社や伊勢神宮に関する政教分離問題などについて

て積極的に発言していく。そうした葦津の言論は、神社界のみならず戦後の思想界にも影響を与え、大きな反響があった。なかでも葦津が『思想の科学』鶴見俊輔らに一目置かれ、彼らと交流を深めたことは有名である。

葦津珍彦の「沖縄への視点」

葦津は戦後早い時期より、米軍施政権下にあった沖縄の状況に心を痛めている。葦津は「神社新報」昭和三一年(一九五六)六月三〇日付一面囲み記事「時局展望」にて「沖縄の同胞は起ち上がった